

「故郷」での違和感

研究参与 森 宏

はじめに

敗戦で内地に引き揚げた後、初めて韓国を訪れたのは 1975 年春である。30 年ぶりの「里帰り」であった。朝鮮戦争で国連軍と中国・北朝鮮軍が 38 度線を境に「押し競」を繰り返したので、ソウルはさぞかしブルドーザーで踏み躪られ、昔の面影は残ってないのではと想像していたが、戦争被害の跡形は少なかった。むかし通った明洞近くの小学校は校舎も元のままで、子供達が元気に走り回っていた。中学校も、登校・下校時に最敬礼を強いられていた御真影奉納殿がなくなっていた以外は、以前と変わらず、名前がソウル高校になっているだけだった。小・中学生時代を過ごしたかつての我が家まで足を伸ばしたが、家の周りも建物も、全く昔のままだった。

懐かしさのあまりあちらこちらほつき歩いたが、ほとんど何処も変わっていない。ただ、通りのサイン、行き交うバスの行き先が分からない。これならどこそこに行くはずと思っても、定かでない。第一韓国語の地名にはなじみがない。昔歯医者さんだったところ、雑貨や・薬屋だったところが、今何をやっているのかも分からない。住んでいた家と庭伝いにあった両親の経営していた事業所が、現在何をやっているのかすら分からない。軒先の看板や入り口のドアが全部ハングルなのである。

敗戦後ソウルの告示や新聞は、直ちに韓国語になったが、漢字の部分はそのままひらがなの部分にハングルが使われているだけなので、ああ韓国語って文法も言葉使いも日本語そっくりで、8割がた分かったと高を括った。ソウルに生まれ、15年間育って、韓国語は朝・夕の挨拶や子供同士の定型的な罵り言葉と、「これ幾ら」「有難う」くらいしか覚えなかった。実家の店（重電機関連の設置・修理）には両親と長兄以外は全部韓国の人で、従業員の間では日常的に韓国語が用いられていたから、ハングルのベシッくすら教えられなかった。

今回訪韓を前にして、幾人かの方に「韓国には 15 歳まで住んでいた」と告げると、「ああそれなら、韓国語はペラペラで困りませんね」が返ってくるが多かった。社研関係者の中には、「困ったら森さんに通訳してもらえばよい」と言われる方もいた。それはそうだろう。生まれて 15 年も育てば、たとえば在日の欧米人の子供がインターナショナル・スクールに通い、正規の言語は英語なりドイツ語を習っても、少なくとも話し言葉は現地の言語に不自由しなくな

るものである。しかし日本の植民地支配の下での朝鮮はそうではなかった。「内地人」の通う学校と朝鮮人の通う学校は歴然と区別されていたが、現地人の子供達の通う学校でも、学内で朝鮮語を話すと体罰を受けることがあったと聞いていた。筆者だけが特別ではなく、小・中校の同級生の中で朝鮮語を、中学1・2年生の英語程度に覚えた人を知らない。

「15年間もいたらさぞかしペラペラでしょう」「それがそうではないのです」に、「そんなはずはないでしょう」の反応を示す方は、年代的に分かれている感じがする。「植民地時代ですから」の言い訳にすぐ納得される方は、概ね50歳代以上で、20-30歳代の中には、朝鮮がかつて日本に植民地支配されていた事実を実感されていない方もいるようである。

韓国 — 超近代化の後

韓国経済が目に見えた成長を遂げるのは、1970年代半以降である。初めての訪韓後、幾年かおきに再訪する機会に恵まれたが、2年半経った1977年秋にアジア財団主宰のシンポジウムに出席した時は、先ずタクシーを拾うのに苦労した。75年春に帰路空港まで乗ったタクシーは、ドアがきっちり閉まらないのに、金浦空港に通じる当時朴大統領ご自慢の高速道をガタピシ飛ばすので、恐怖を覚えたことを今でも覚えている。2回目の時はタクシーの台数も増え、格段に新しい車が多くなっていたが、学生と思しき若い人たちも利用するようになっているためか、簡単には拾えない。またあちこちに高層ビルが建つようになって、子供のころ町なかで方角の目印にしていた明洞の丘の上に建つフランス教会の高い塔が見えなくなっていた。

地震が無い所為か、韓国ではビルが建ちだすと簡単に20階建て30階建てになるようである。ソウルが見違えるようになったのは、1988年初秋のオリンピックを契機としている。地下鉄が走り、立派なホテルや高層アパートが地下鉄や高速道路沿いに林立するようになった。オリンピックでよかったのは、町なかの看板や道路標識、地下鉄の駅名などにローマ字表記が現れるようになった点である。最近では日本人/中国人観光客を対象に、漢字の標識も増えてきた。とは言っても、町なかにはハングルだらけで、漢字はおろか英語の広告や看板もほとんど見当たらない。地下鉄のなかなどで、日本人向けの地図を示して、ここまで行きたいと道順を尋ねても、40歳代の人でも漢字が全く読めないらしく、親切にしてくれようとしても助けにならないことが多い。2-3年前、ある大学で講義を頼まれ、統計数字中心の話なので、図表も漢字で表記し、漢字を多くしたレジメを用意したのだが、「うちの学生で漢字を読めるものは1人もいない」と聞かされ、思わず「まさかそんなことないでしょう」と口走ったことがある。日本語との違いは、ひらがな部分がハングルになっているだけとの観念から抜けきれていないのである(上記)。

今回の調査旅行でソウルの後は、高速道路を350キロ南下して光州を訪れ、それから西海岸

の蔚山と釜山まで「L字型に」（村上事務局長）、バスの車中から韓国を眺めることができた。15年もいたが、ソウルのほかはせいぜい仁川や水原くらいまで、あまり遠出はしなかった。平壤にも行ったことがないくらいだから、「光州事件」を耳にしても、位置関係や町の大きさなどは実感していなかった。

今回の旅行でソウルの周辺以外に、大都市から離れた郡部を見ることができたのは収穫であった。バスで隣り合わせた水川氏も「国の隅々まで高速道路を作って、まだ作っている」と感心しておられたが、国土の整備・充実は、景気対策としての公共投資以上のものを感じさせた。ここ数年幾つかの大学（今回はソウル郊外に全校移転した檀国大学）を訪れる機会を持ったが、たとえば早・慶の姉妹校といわれる高麗大学や延世大学のキャンパスの立派さと、高麗大学では2度講義をさせてもらったが、学部3年生の質問が修士院生並みの高さに、「日本はすでに追い抜かれている」と感服した。

ソウル市内や周辺部で、高速道路沿いに30階建て以上の背の高いアパートが立ち並んでいるのはすでに触れた。戦前は7-80万人しか住んでいなかったところに、いまや1000万以上の人口が密集しているのであるから、たとえば香港同様、のっぽのビルが立ち並ぶのは分かる。しかし今度バスの中から眺めた限り、光州や釜山のような100-300万都市に限らず、小都市の郊外で周りに畑や耕作していない未利用地が沢山あるところに、「突如として」30-35階建てのアパート群が、寄り添うように立ち並んでいる。概して建物の奥行きが浅く、また建物と建物の間隔が、遠目には超狭い感じがする。建蔽率とか容積率という規制は韓国にはないのかしら、またその背景にある日照権とか眺望権などという観念は韓国には存在しないのかしらと訝るのである。そう言えば、昔韓国人の住居は、寒い冬に備えて、厚い石壁の上のほうに小さな窓が開いていて、日照とか眺望は二の次であったことを覚えている。暖はオンドルで有効に取るというのであろう。米国でも「南向きの日当たりの良い」は、謳い文句にならない。とは言っても、田舎の小さな町の周辺の「寄り添う」超高層アパート群は、いかにも異様である。

そう言えば、わが国で1960年代から70年代にかけて全国津々浦々に、住宅公団・自治体の供給公社が競って建てた箱型5階建ての50-60平米の3LDK「団地」は、初めて日本を訪れた欧米の人たちの目には、異様に映ったことだろう。あの頃から一世代以上経った今、多くの団地は古ぼけ・狭くて若者には人気がなく、エレベーターもないので年寄りには住み難い。かといって建て替えるのもままならない。そういうケースが全国各地で報じられている。その点、欧州の各都市に見られる「長屋式住宅」は立派である。数ヶ月住んだことがあるオランダのデン・ハーグでは、19世紀末から20世紀初頭に建てられたというアパート群と、近年建てられたアパート群の間で、素人が外から見た限りでは区別がつかない。建てる以上は、「きちんと」建てているのである。

インターネットで検索すると、韓国にも「建蔽率」「容積率」の規制は存在する。日本のそれによく似た「建築基準法」と「都市計画法令」「国土利用管理法令」があり、建蔽率の最大限度は、「緑地地域においては、100 分の 20 以下；住居地域においては、100 分の 90 以下」など。容積率の最大限度は、「緑地地域においては、200 パーセント以下；住居地域においては、700 パーセント以下；地域の指定のない区域においては、400 パーセント以下」などで、概してわが国よりやや甘めに設定されている感じがする。ただ一番問題に思えるのは、建蔽率に関し、「土地利用度を高めなければならない必要がある場合であって大統領が定めるときは、上記の規定にかかわらず当該地方自治団体の条例で建蔽率を別に定めることができる。＜改正 95・1・5＞；また容積率に関し、「建築物の周囲に公園・広場・道路・河川等の空地があり、またはこれを設置する場合には、上記の規定にかかわらず大統領令が定めるところにより当該自治団体の条例で容積率を別に定めることができる。＜改正 99・2・8 法 5895＞という、「大統領令が定めるところによる」特例である。これなら、各地で見た郡部にはそぐわない超のっぽマンション群の説明もつく。

オンドルと立て膝

今回の韓国旅行は、ソウルで宿泊した Shilla Hotel から釜山の Lotte Hotel まで、どこも一流ホテルで、しかも各人一部屋が許されたので、自分のいびきも人のそれも気にすることなく、とても気楽に休めて助かった。昼食も夕食も訪問先のパーティー以外は、韓国式のレストランで、質量ともたっぷりしたご馳走に与かった。「これでは体重が増える」と心配される方もいた。

ただ私が困ったのは、オンドルの固い床と薄い座布団である。脚が痛くて落ちていて食べていられない。これは今回だけに限らない。これまでも、ソウルの大学や研究所などで夕方仕事が終わって夕食になるとき、「森先生は腰掛けるところが好いと言われるけど、それでは学生たちが行くところに限られ、困ってしまう」とこぼされることが多かった。飲むのもおしゃべりも大好きだけど、オンドルの固い床で 1-2 センチの超薄い座布団では、おちおち杯を重ねてもいられない。歳をとるとおしりの肉も薄くなるし、膝の関節が硬くなっているから、正座は勿論のこと長時間胡坐もかいてもいられない。

堪りかねて、片方ずつ膝を立てることになる。「森さんは韓国生まれだけあって、流石に慣れておられる」と感心されたが、私は韓国生まれの韓国育ちでも、当時の我が家では畳の上で寝起きしていたから、オンドルの固い床には馴染みがない。韓国は夜分寝るときも敷布団はマットレスもなく、とても薄い布団だから、ゆっくりその日の疲れを取ることはできない。

私は特に和食ファンではないが、和風のファミレスは大好きである。掘り炬燵式の食卓は、

冬は足もとがふんわりと温かく、椅子に姿勢を正して腰掛けるより気が楽で、落ち着ける。時折外国からのお客さんをお連れすることがあるが、皆さん気に入ってくれる。

ソウルでも一度だけ、それ式のお好み焼きの店に連れて行かれたことがあるが、まだ工夫の余地があるような感じで、日本の和風ファミレスの快適さからはほど遠い。韓国はお昼でも、日本のカレーライス、カツ丼と少々の漬物といった単品でなく、メインの料理にキムチ以外にもいろいろ、時に10種類くらいの副食が付いてくる。しかし足のやり場を気にしては、せっかくのご馳走が楽しめない。ミニスカートの女の人は膝を立てるわけにもいかないし、韓国育ちでも膝を立てたくらいでは、落ち着いてあれこれお皿を試す余裕は出てこない。